



四旬節第5主日 (ヨハネ 8:1-11)

イエスひとりと、真ん中にいた女だけ

四旬節もこの一週間で聖なる一週間「聖週間」へと向かう大切な時期です。与えられた福音朗読を通して、十字架上の死と復活に向かうイエスの思いを知り、イエスに付き従う心の準備を整えることにしましょう。

黙想会が終わりました。皆さんにとってどのような収穫があったでしょうか。私は三日間、司教様の接待をして気疲れをしました。本当は気疲れと言うほどのものではありませんが、司祭館に家主よりも身分のある方をお泊めして、接待したのですから気を遣ったことは確かです。

この疲れは大型連休のときに休みを頂いて、疲れを取りたいと思います。ですから大型連休中、司祭館のチャイムを鳴らしたり電話を掛けたりしないでください。そこに私はいません。居留守なんか使ったりしません。大阪の風に、大阪の風になって、あの甲子園の空を吹き渡っています。大阪では、田平から転出した人に会ってこようと思っています。

福音朗読箇所は、「姦通の女」という物語ですが、一つ私たちが陥っている思い込みのようなものを指摘したいと思います。朗読には次のような部分があります。「これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。」(8・9)

この場面で、「イエス一人と、真ん中にいた女が残った」とあり、二人きりのはずです。けれどもいつの間にか、私たちは立ち去らずにその場に留まっていなんでしょうか。ここに疑問を持ちました。私もまた同じ過ちに陥って今日の朗読で二人きりの場面のはずなのに、私はそのまま残っているつもりだったのです。

「私たちがその場に残っていたとして、それが何か問題なのでしょう。か。」問題があるのです。二人きりなら話せることも、そこに読者が立ち会っていたら、話せなくなるのです。

たとえば赦しの秘跡の場面は、「イエスの身分で執り行う司祭と、罪を告白するその人との、二人だけのはずです。誰か別の人がその場にいたら、告白をする人は告白できません。朗読の場面もまさに、姦通の罪を犯した女性をゆるす言わば初めての「赦しの秘跡」の場面だったかもしれないのです。

もう一度、イエスと姦通の罪で突き出された女性とを、二人きりにさせてあげましょう。その時初めて、イエスの深い憐れみに触れるかも知れませんが、イエスのことばを、イエスに突き出された女性だけが受け取る。その時やっと、イエスのことばの本当の意味にたどり着きます。

イエスと目の前にいる人、二人きりになったとき、見捨てられた人を見捨てないイエスの愛に私たちも触れるのではないのでしょうか。